

脱下請け、メーカーに



京の金属加工会社

京都市内の金属加工会社で、自ら部品を開発販売したり、ゴルフのパター会社に転身したりと、下請けを脱してメーカーを目指す動きが増えている。国内の需要が減少する中、独自技術で活路を見いだそうとしている。

南区の二九精密機械工業は、軽量で強度や弾力性が高いβチタン合金のパイプを内径0・2ミリまで細くできる技術を開発した。医療機器や釣りざおなど幅広い受注があり、昨年末には約4億円を投じ、近くに加工工場を建設した。

2004年に取引先から相談され、約7年かけて開発した。二九良三社長は「下請けだけでは将来

に危機感があり、自ら提案できる製品を作ろうと思った。下請けもしながら、メーカーとしてβチタンパイプを国内外で売り出したい」と意気込む。現在約18億円の売上高を、数年後には50億円まで伸ばす目標だ。

右京区の最上インクスは、電子機器や電化製品の内部の熱を逃がす放熱部品の開発販売に力を

自社製品開発に情熱

入れる。

銅やアルミを波形や渦巻き型に加工して表面積を増やした部品で、「将来性がある」と2年前に

専門部署を設けた。温度解析装置などを導入し、顧客の要望に応える体制を整えた。放熱部品事業で本年度に約3億円、15年度には約10億円の売上高を目指す。

鈴木滋朗社長は「人件費の安いアジアの台頭を受け、先進国で認められる価値あるものづくりを目指そうと思った。製造業大手から『自分たちで設計するより任せた方が安い』と言われるメーカーになりたい」とする。

ゴルフのパターメーカーに転身したのは南区のベノックだ。個人に合った形状、角度に製作し、1本約15万円と高額ながら愛用者が広がっている。

1999年に創業し、携帯電話の部品用金型の製作などで業績を伸ばしたが、奥田潤社長が「自社製品を世に出せる会社にしたい」と決意。ゴルフが趣味だったことから、最適なパターを作る独自理論を編み出し、得意の微細加工技術で製作する会社になった。

奥田社長は「精度よく削る技術を生かした高級品を作ろうと考えた。オーダーメードパターの市場を作りたい」と新ビジネスの拡大を目指す。